Publication Manual of the American Psychological Association 第 7 版の文法記述について

――保守からリベラルへと変わるアカデミックライティング――

江　藤　裕　之

2020 年[1]、*MLA Handbook for Writers of Research Papers*（Modern Language Association of America, 2016）、*A Manual for Writers of Research Papers, Theses, and Dissertation*（Turabian, 2018）、*The Chicago Manual of Style*（University of Chicago Press, 2017）などと並んで、北米をはじめとする世界各地の研究教育機関で広く使われている学術論文作成マニュアルの代表的な一冊である *Publication Manual of the American Psychological Association*（以下、「APA マニュアル」とする）の改訂新版（第 7 版）が出版された（American Psychological Association[2], 2020）。その書名が示すように、APA マニュアルはもともと米国心理学会が編纂・発行する心理学系の学術論文集の執筆要領、および投稿手順をまとめたものであり、1929 年に 7 ページ足らず[3] の紙幅で米国心理学会の *Psychological Bulletin* 誌に掲載されたのがはじまりであった（Bentley et al., 1929）。その後、90 年もの長きにわたり改訂が重ねられ、学術研究の進歩に応じた学術論文作成のガイドライン、および、研究や文章表現に対する倫理的態度の変化にマッチした信頼のおけるアカデミックライティングの規範的ルールを提示し続けてきた。その結果、今日では、APA マニュアルは心理学を超えて、広く社会科学、行動科学、ヘルスケア関連諸科学、自然科学、人文学などの学問分野における研究者、教育者、学生に広く利用されている（APA, 2020, p. xv）。

前回の改訂（APA, 2010）から 10 年の時が過ぎ、その間、科学研究、教育を取り巻く環境は大きく変わった。特に ICT や IoT といったインターネット関連の技術の進歩には目を見張るものがある。APA マニュアルをはじめとする学術論文作成マニュアルはその変化に対応すべく、ウエブサイト上で不断に最新の情報とスタイルを提供してきたが[4]、その成果がいったんここでまとめられ紙媒体での改訂新版が出版されたことは利用者にとって喜ばしいことである。

直前の第 6 版では、研究倫理、偏見のない文章表現の内容がより詳細に記述された点や、学術論文の標準的な記述内容を示した Journal Article Reporting Standard（JARS）[5] や Meta-Analysis Reporting Standard（MARS）[6] などの画期的な提案がなされたが[7]、今回の改訂では、そういった新機軸を維持・発展させつつも、全体的に見て、読みやすさ、使いやすさという点において改善がなされ、特に多

1　2019 年夏以降には入手可能であったが、本書の Copyright Page には 2020 と記載されているのでそちらに従った。
2　以下、APA とする。
3　第 7 版の分量は xxii+427 pp である。
4　Cf. APA STYLE at https://apastyle.apa.org/
5　学術論文報告基準（新たに収集したデータを報告する論文原稿に含むとよい情報）（cf. 前田他 , 2004, pp. 277-280）。
6　メタアナリシス報告基準（メタアナリシスを報告する際に論文原稿に含むとよい情報）（cf. 前田他 , 2004, pp. 281-283）。
7　他にも特筆すべき改訂として、第 6 版以前は例示箇所にクーリエ書体（Courier）が用いられていたが（cf. APA, 1994; 2001）、第 6 版ではゴシック体が採用されている。これは、論文原稿をタイプライターで書くことが意識されなくなったことの表れであろう。

色刷りや図表によるまとめを多くするなどヴィジュアル面での工夫が多く施されている[8]。

本稿では、APA マニュアル第 7 版の文法に関連する記述（第 4 章 Writing style and grammar の Grammar and usage）に焦点をあて、その内容を前版（主として、直近の第 6 版）と比較しながら、今回の改訂で特筆すべき点があるか、あるとすればどのような点かを明らかにしてみたい。そのことで、アカデミックライティング研究、またアカデミックライティング指導の一助となればと考えている。

APA マニュアル第 7 版の文法記述の内容

筆者は以前 APA マニュアルにおける英文法の記述内容について報告したが（江藤 , 2004, 2012）、その特徴を簡単に言えば、言語（英語）における慣用ではなく、論理を重視して文法的正誤の判断の基準（根拠）にしているという点であり、それは William Lily（1468-1522）による中世ヨーロッパのラテン文典の記述方針をベースにして Robert Lowth（1710-1787）や Lindley Murray（1745-1826）らによって 18 世紀末の英国で成立した規範英文典の伝統を受け継ぐものであると主張した（江藤, 2012, pp. 187-188）。では、APA マニュアル第 7 版における英文法記述はどのような内容になっているか見ていこう。

第 7 版第 4 章 Writing style and grammar の構成

まず、文法に関する記述を含んでいる第 4 章 Writing style and grammar 全体の構成を前版と簡単に比較してみよう。APA マニュアル第 7 版と第 6 版の「文体と文法」に関する章の大項目は次のようになる。

表 1.「文体と文法」に関する章の大項目新旧対照表

第 7 版	第 6 版
4. Writing style and grammar Effective scholarly writing Grammar and usage	3. Writing clearly and concisely Organization Writing style Reducing bias in language General guidelines for reducing bias Reducing bias by topic Grammar and usage

第 6 版にある差別表現に関する 3 つの項目（Reducing bias in language, General guidelines for reducing bias, Reducing bias by topic）が第 7 版では消えているが、これらの項目は、第 7 版では大幅に加筆され、新たに 1 つの章（5. Bias-free language guideline）が設けられ、そこにまとめられたためである（APA, 2020, pp. 131-149）。このことは、APA マニュアルの編集者が論文執筆において注意すべき倫理的問題の 1 つとして、年齢、障害、ジェンダー、研究参加者、人種・民族的アイデンティティ、性的指向、社会経済的地位、インターセクシャリティーに関する表現方法への配慮の必要性を強く認識し、そこに明確なガイドラインを示した結果とみることができる。

8　今回の特筆すべき変更点の 1 つに、Reference リストに記載する書籍の文献情報から出版地が削除され、Author or editor.（Date）. *Title of book.* Publisher name. のみとなった点がある。電子出版の場合は、出版社の名称ではなく DOI もしくは URL でもよい。前版までは、Publisher information として、Location: Publisher name の両方が必要で、Location が米国の都市の場合には州の略号を付さなくてはならず煩雑な作業を要求されたが、それが簡略化されたことは喜ばしい。なお、本項の引用文献一覧では、新方式はまだなじまないため、以前の方式を採用した。

差別表現に関する 3 つの項目が削除されたことで、第 7 版第 4 章 Writing style and grammar は Effective scholarly writing と Grammar and usage の 2 項目から構成されることになった。そこでは、第 6 版の Organization（論文構成）[9] に含まれていた Length（論文の長さ）と Headings（論文内見出し）が第 7 版では新たな章（2. Paper elements and forma）に、そして、Seriation（並列化）の記述が他の章（6. Mechanics of style）に組み込まれた。その結果、第 7 版の「文体」に関する項である Effective scholarly writing の記述内容は、第 6 版における Writing style の内容を引き継ぐかたちで、次のようになっている。

表 2.「文体」に関する項の小項目新旧対照表

第 7 版	第 6 版
Effective scholarly writing	Writing Style
Continuity and flow	3.05 Continuity in presentation of ideas
4.1 Importance of continuity and flow	3.06 Smoothness of expression
4.2 Transitions	Noun strings
4.3 Noun strings	3.07 Tone
Conciseness and clarity	3.08 Economy of expression
4.4 Importance of conciseness and clarity	Wordiness
4.5 Wordiness and redundancy	Redundancy
4.6 Sentence and paragraph length	Unit length
4.7 Tone	3.09 Precision and clarity
4.8 Contractions and colloquialisms	Word choice
4.9 Jargon	Colloquial expressions
4.10 Logical comparisons	Jargon
4.11 Anthropomorphism	Pronouns
	Comparisons
	Attribution
	Third person
	Anthropomorphism
	Editorial we
	3.10 Linguistic devices
	3.11 Strategies to improve writing style

ここでは各項目の内容についての詳細な比較は避けるが、第 7 版で改編された主な点は次の通りである。

- Strategy to improve writing style は、大幅に書き加えられ Grammar and usage の項に移動した（次節を参照）。
- Linguistic devices（修辞的技巧）[10] は、Importance of conciseness and clarity の項にまとめられた。
- Wordiness and redundancy（言葉数の多さと重複）、Jargon（隠語）、Anthropomorphism（擬人化）が項目として独立した。
- Pronouns、Third person[11]、Editorial *we*[12] は、Grammar and usage の項にまとめられた（次節を参照）。

9　項目の日本語訳については、必要があると判断した場合に、初出のみに付す。

10　詩的な表現、頭韻・脚韻、メタファーなど。

11　実際に行った調査や実験を記す際には、the author（s）や the researcher（s）などの第三者的表現ではなく、I, we などの具体的な人称代名詞を用いるといった説明。

12　一人称複数の we は筆頭著者と共著者（共同研究者）に限定し、漠然と広い意味で用いないといった説明。

第 7 版では内容的に見て、項目がより系統的・具体的に整理されている。これら二つの版に共通する項目の記述内容は概ね同じであるものの、以上の中で、最後の点が重要であり、次節で詳しく見てみたい。

第 7 版第 4 章内の Grammar and usage の構成と第 6 版との比較

第 7 版第 4 章中の Grammar and usage についての記述は、Verbs、Pronouns、Sentence construction、Strategies to improve your writing の 4 つの項から構成されており、その記述内容に対応する第 6 版の箇所は次の表のようになる。

表 3.「文法」に関する項の小項目新旧対照表

第 7 版	第 6 版
Grammar and usage	Grammar and usage
Verbs	3.18 Verbs
4.12 Verb tense	Prefer the active voice
4.13 Active and passive voice	Select tense carefully
4.14 Mood	Select the appropriate mood
4.15 Subject and verb agreement	3.19 Agreement of subject and verbs
Pronouns	3.20 Pronouns
4.16 First- versus third-person pronouns	3.21 Misplaced and dangling modifiers and use of adverbs
4.17 Editorial “we”	Misplaced modifiers
4.18 Singular “they”	Dangling modifiers
4.19 Pronouns for people and animals (“who” vs. “that”)	Adverbs
4.20 Pronouns as subjects and objects (“who” vs. “whom”)	3.22 Relative pronouns and subordinate conjunctions
4.21 Pronouns in restrictive and nonrestrictive clauses (“that” vs. “which”)	Relative pronouns
Sentence construction	That *versus* which
4.22 Subordinate conjunctions	Subordinate conjunctions
4.23 Misplaced and dangling modifiers	While *and* since
4.24 Parallel construction	While *versus* although, and, or but
Strategies to improve your writing	Since *versus* because
4.25 Reading to learn through example	3.23 Parallel construction
4.26 Writing from an outline	*Between* and *and*
4.27 Rereading the draft	*Both* and *and*
4.28 Seeking help from colleagues	*Neither* and *nor; either* and *or*
4.29 Working with copyeditors and writing centers	*Not only* and *but also*
4.30 Revising a paper	

この中で、第 7 版の「文章力を高める方略」について書かれた Strategies to improve your writing（4.25 Reading to learn through example, 4.26 Writing from an outline, 4.27 Rereading the draft, 4.28 Seeking help from colleagues, 4.29 Working with copyeditors and writing centers, 4.30 Revising a paper）は、第 6 版第 3 章の Writing style の中の 1 項目（3.11 Strategies to improve writing style）の記述内容に（APA, 2010, p. 71）、第 8 章の The publication process で言及された内容を追加するかたちで、大幅に手が加えられている。しかし、この部分は直接に文法の内容とは関係なく、文法のミスを無くすための方法の提案について述べられているため、ここではその内容の解説を省略する。

本稿で問題にしたい文法に関する記述の中核をなす部分は、Verbs、Pronouns、Sentence construction であり、第 6 版と第 7 版の記述内容の対応は下記の表のようにまとめられる。

表 4.「文法」に関する項の第 7 版・第 6 版の小項目対応表

第 7 版	第 6 版
Verbs	3.18 Verbs
4.12 Verb tense	Prefer the active voice
4.13 Active and passive voice	Select tense carefully
4.14 Mood	Select the appropriate mood
4.15 Subject and verb agreement	3.19 Agreement of subject and verbs
Pronouns	3.20 Pronouns
4.16 First- versus third-person pronouns	3.21 Misplaced and dangling modifiers and use of adverbs
4.17 Editorial “we”	Misplaced modifiers
4.18 Singular “they”	Dangling modifiers
4.19 Pronouns for people and animals	Adverbs
4.20 Pronouns as subjects and objects	3.22 Relative pronouns and subordinate conjunctions
4.21 Pronouns in restrictive and nonrestrictive clauses	Relative pronouns
Sentence construction	Subordinate conjunctions
4.22 Subordinate conjunctions	3.23 Parallel construction
4.23 Misplaced and dangling modifiers	
4.24 Parallel construction	

この表からわかるように、第 6 版の Grammar and usage の項目はほぼ第 7 版に受け継がれており、さらに、第 7 版では系統立ててよりシンプルな項目立てがなされている。第 6 版の Adverb については、導入語や接続語としての副詞の用法についての説明であることから、第 7 版では Effective scholarly writing の 4.2 Transitions の項目に組み込まれ、Grammar and usage から除外されている。それでは、第 7 版の Grammar and usage の 3 つの項目（Verbs, Pronouns, Sentence construction）の記述内容はいかなるものか。

Verbs では、例文などが若干差し替えられているものの、第 6 版の 3.18 Verbs と 3.19 Agreement of subjects and verbs（主語と動詞の数の一致）をまとめて 1 つの項とし、その内容がほぼそのまま踏襲されている。たしかに、Agreement of subjects and verbs は独立させるよりも、動詞の一項目として扱った方が合理的である。全体的にみて、voice や mood といった文法用語の説明、collective nouns についての解説、代名詞 none の用法説明が加わるなど、文法事項の説明内容がより詳しくなっている。第 6 版で Agreement of subjects and verbs の箇所に記載されていた、datum/data や phenomenon/phenomena などの外来語系の複数形についての注意は第 7 版では第 6 章内の Spelling に移っている（APA, 2020, pp. 161-162）。

Pronouns では、第 6 版の 3.20 Pronouns から、who と that の区別に関する記述[13]、who と whom の区別に関する記述[14]、また、3.22 Relative pronouns and subordinate conjunctions から、that と which の区別に関する記述[15]が、少し解説が詳しくなっているものの、ほぼ同じ内容で掲載されている。これらの内容が、関係代名詞に関する項目（4.19~4.21）にまとめられたことで、第 6 版よりもわかりやすい配列になっている。なお、第 6 版の 3.20 Pronouns にあった「代名詞とそれがさす名詞の数・性の一致」と「動名詞の意味上の主語」は、第 7 版では別の箇所に移動している[16]。

13　先行詞が人の場合は who を、人以外の場合は that, which を用いる。動物については、名前から性別が判断できる場合を除き、代名詞は it を用いるといった説明。

14　先行詞が人の場合、主語になる関係代名詞は主格の who を、動詞・前置詞の目的語になる関係代名詞は目的格の whom を用いるといった説明。

15　APA では、先行詞が人以外の場合、制限的な用法には that を、非制限的な用法には which を用いることを推奨するといった説明。

16　「代名詞とそれがさす名詞の数・性の一致」は 4.16 First- Versus Third-Person Pronouns に移動、「動名詞の意味上の主語」についての記述は削除されている。

この項の重要な点として、第 7 版では 4.16 First- versus third-person pronouns、4.17 Editorial “we”、4.18 Singular “they” の 3 つの項目が Pronouns の項に加えられたことがあげられる。ただし、4.16 First- versus third-person pronouns と 4.17 Editorial “we” については第 6 版の 3.09 Precision and clarity 内の Attribution に記載されていた Third person, Editorial *we* の内容が整理される形で掲載されており、内容的にはそれほど変わっていない [17]。したがって、ここで新しく書き加えられた項目は 4.18 Singular “They” のみとなるが、この内容については次節で述べる。

最後の Sentence construction であるが、この箇所は第 6 版の 3.21 Misplaced and dangling modifiers and use of adverbs[18]、3.22 Relative pronouns and subordinate conjunctions[19]、3.23 Parallel construction[20] から、ほぼ同一の内容を、例示を図表化するなど、よりヴィジュアル的にわかりやすい形でまとめ直されている。

第 7 版の Grammar and usage の項目で新たに加えられた Singular “they”

第 7 版で文法の記述に新たに加えられた 4.18 Singular “they”（APA, 2020, pp. 120-121）に記載されている内容を箇条書きにすると次のようになる。

1. 自らを指す代名詞に they を使用する人を指す場合には単数の they を用いる。
2. ジェンダーが判明できない人、あるいはジェンダーが文脈に関係のない場合には、総称的な三人称単数の代名詞として they を用いる。
3. アカデミックライティングにおいて、かつて単数の they は推奨されなかったが、現在では多くの支持者が存在し、その使用を認めている辞書も存在する。
4. 単数の they の変化は、they, them, their, theirs, themselves となるが、指示対象が明らかに単数の場合は themself としてもよい [21]。
5. 総称的な三人称単数の代名詞として he もしくは she を単独で用いない。総称的な用法として he or she、she or he は使用可能だが、指示対象にこの表現が適切かどうか判断できない場合は単数の they を用いるか、他の表現に書き換える。なお、she or he を (s)he や s/he のように組み合わせて書いてはならない。
6. 他の表現への書き換えについては、語を言い換える（she → that person）、複数名詞・代名詞を用いる（A therapist … his → Therapists … their）、his や her の代わりに定冠詞 the を用いる（A researcher … her grant → A researcher … the grant）、代名詞を省略する（The researcher … his own biases and expectations → The researcher …biases and expectations）といった方法があげられている。

17　曖昧さを避けるため三人称（the author / the authors）より一人称（I / we）の使用を推奨する（ただし、we は著者である「わたし」と共著者のみを指す場合に使用する）、we の使用範囲を明確にして可能な限り内容が明確に使わる名詞を用いる、といった点。

18　Misplaced modifiers（曖昧な修飾語句）と dangling modifiers（懸垂修飾語句、独立分詞構文）についての記述。

19　While *and* since; while *versus* although, and, or but; since *versus* because などの subordinate conjunctions についての記述。

20　*Between* and *and; both* and *and; neither* and *nor, either* and *or, not only* and *but also* についての記述。

21　以上の点に関して以下の例が挙げられている（APA, 2020, pp. 121 イタリック引用者）。
Each participant turned in *their* questionnaire.
Jamie shared *their* experiences as a genderqueer person.
A child should learn to play by *themselves* [*or themself*] as well as with friends.
Rowan, a transgender person, helped *themselves* [*or themself*] to the free coffee.

単数の they は目新しいものではなく、その歴史は古い。*Oxford English Dictionary* での初出例は 1526 年となっている。しかし、どちらかというと論理を重んじる伝統的な規範文法（McKnight, 1928）では単数の they の使用は避けられており、あくまでもインフォーマルなスタイルであるとの認識が長く続いた（Huddleston and Pullum, 2002, p. 493）。たとえば、伝統的な規範文法では、総称の三人称単数を表す場合は *Every student* should bring *his* own dictionary. が正しい表現とされ、それに反発して *Every student* should bring *his or her*［*or her or his*］own dictionary. のように表現するのは 1 つの妥協的工夫だと思うが、今回の APA の改訂では、単数の they を用いた *Every student* should bring *their* own dictionary. が三人称単数の総称表現として推奨されることになる。ここに元来は三人称複数代名詞である their を用いるということは、論理を重視する規範的な伝統文法からすると、大きな改革ということができよう。

こういった改訂の背景にあるものは、純粋に語学的な問題ではないように思われる。つまり、上の例で言えば、every student は形式的には単数だが、内容的には複数をイメージするので代名詞は their で受けるのがよいのではないかといった議論ではない。むしろ、それは、差別や偏見のないジェンダー表現という視点からの三人称単数代名詞の用法の改革ということであろう。このことは、文法記述に「論理的な正しさ」よりも優先すべき「政治的な正しさ（political correctness）」への配慮がなされるようになった結果とも考えることができる。それは、本項（4.18 Singular“they”）と同じ内容が第 4 章の Bias-free language guidelines でより詳しく記述されていることからも支持できよう（cf. APA. 2020. p. 140）[22]。

おわりに

以上、APA マニュアル改訂新版（第 7 版）の文法記述を概観し、その内容を前版と比較してみた。すでに述べたように、前版の Grammar and usage の項目と記述内容はほぼ受け継がれ、構成はよりシンプルで系統的になっている。全般的に、読みやすさ、使いやすさという点において多くの改善がなされ、特に多色刷りや表によるまとめを多くするなどヴィジュアル面での工夫が施されている。今回の改訂において、Grammar and usage の内容に関し唯一特筆すべき点があるとすれば、単数の they に対する扱いである。

書き言葉は一般的に保守的である。とりわけ、文章の曖昧さをなくし、文意を正確に伝えることが求められるアカデミックライティングにおいては、その保守性が際立っているように思える。ここでいう「保守的」とは、口語的なインフォーマル・スタイルを排して、多少古臭くて硬いと感じられようとも、意味が正確に伝わる論理的で簡潔かつ明瞭や表現を目指す態度のことである。それは、よく「学校文法」などと揶揄される伝統的な規範文法的態度と言ってもよい。

APA マニュアルにおいても、主語と動詞の数の一致、関係代名詞 whom の使用、並列構造、比較などの項目にある記述から、こういった保守的な傾向がうかがえる（江藤 , 2004, 2012）。また、日常のコミュニケーションでは絶対に受け入れられることのない主格補語の表現（e.g., It's I.）を、論理的に正しいという理由で推奨する「超保守的な」アカデミックライティングの教科書も存在する（Hacker, 2009, p.37）。

上に述べたように、APA マニュアルの改訂新版の文法記述に、単数の they が盛り込まれたこ

22　第 6 版では第 3 章 Writing clearly and concisely の中の Reducing bias by topic 内の小項目 3.12.Gender および Grammar and usage 内の小項目 3.20. Pronouns の一部に同様の記載がある（APA, 2010, pp. 73-74 & p. 79）。

とは、語学的関心の故というよりも、多分に political correctness への配慮である。これは、保守的なアカデミックライティングに、革新的・リベラル的な態度が入ってきたこととも見ることができ、このことは、今後、論文執筆の際に十分気をつけなくてはならない重要な表現上の倫理的配慮の 1 つとみなされよう。これは、小さな改訂ではあるが、大げさに言えば、英文法の歴史における画期的な出来事と言えるかもしれない。

引用文献

江藤裕之 .（2004）. *Publication Manual of the American Psychological Association* の英文法記述について．長野県看護大学紀要．6: 35-43.

江藤裕之 .（2011）. 英語論文作成マニュアルの特徴とアカデミック・ライティングの授業への応用――MLA, APA, Chicago の比較から．東北大学国際文化研究科論集．19: 117-125.

江藤裕之 .（2012）. 英語論文作成マニュアルにおける英文法解説――慣用よりも論理に重点を置く規範英文法．東北大学国際文化研究科論集．20: 181-189.

前田樹海、江藤裕之、田中建彦訳 .（2004）. APA 論文作成マニュアル（第 2 版）. 東京 : 医学書院 .

American Psychological Association.（1994）. *Publication manual of the American Psychological Association*（4th ed.）. Washington, DC: Author.

American Psychological Association.（2001）. *Publication manual of the American Psychological Association*（5th ed.）. Washington, DC: Author.

American Psychological Association.（2010）. *Publication manual of the American Psychological Association*（6th ed.）. Washington, DC: Author.

American Psychological Association.（2020）. *Publication manual of the American Psychological Association*（7th ed.）. Washington, DC: Author.

Bentley, M., Peerenboom, C. A., Hodge, F. W., Passano, E. B., Warren, H. C., & Washburn, M. F.（1929）. Instructions in regard to preparation of manuscript. *Psychological Bulletin, 26*（2）, 57–63. Doi: 10.1037/h0071487

Hacker, D.（2009）. *A pocket style manual*（5th ed.）. Boston, MA: Bedford/St. Martin's.

Huddleston, R., & Pullum, G. K.（2002）. *The Cambridge grammar of the English language.* Cambridge, UK: Cambridge University Press.

McKnight, G.（1928）. *Modern English in the making.* New York, NY: Appleton.

Modern Language Association of America.（2016）. *MLA handbook for writers of research papers*（8th ed.）. New York, NY: Author.

Turabian, K. L.（2018）. *A manual for writers of research papers, theses, and dissertations*（9th ed.）. Chicago, IL: University of Chicago Press.

University of Chicago Press.（2017）. *The Chicago manual of style*（17th ed.）. Chicago, IL: Author.